
Just Be Friends by.友達

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Just Be Friends by 友達

【Nコード】

N7088P

【作者名】

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

【あらすじ】

クリスマス企画！

二次創作だけど純愛に挑戦！！

……下手です。すみません

（ちなみに、作者は騒動とかは無視しているので、御気分を悪くされた方は報告して下さい。即刻消去します）

(前書き)

はい！ 回線が死んでいたものでちょっと遅れて投稿です！

……クリスマスほとんど関係ないのは秘密

ま、OKして下さい！

純愛に挑戦！

……すみません。やっぱり変態の方が得意です。

しかも見る限りリア充だし、リア充の心理など見たくもないし。
さて、さっさと本編行きましょうか

目が覚めた。

周りを見渡す。目にはいるのは散らかった本や雑貨、それに割れた花瓶。

あとは疲れ果てた彼女。少し痛みを感じて手元を見ると、指の辺りに少し切ったような傷が出来ている。

それだけで思い出したくもないことを思い出してしまう。

昨日の夜、喧嘩した。

理由は大したことではない。態度が冷たいとか、最近素っ気ないとかでよく覚えていない。

口論から徐々に発展していき、彼女がキレて物を投げつけてきただけだ。

一応、朝食を摂ることにした。適当に冷蔵庫の中の物で作る。何も考えずに二人分の朝食を作ってしまった。どうせ、放っておくと彼女は大した物を食べないので、机の上に、ラップを掛けて置いておく。

暗い部屋の中で、黙々と食事を口に運ぶ。目の前にあるラップのかかった目玉焼きとサラダが、妙に寂しい雰囲気を出していた。

部屋の中はサラダを咀嚼する音しか聞こえない。

こんな時に限って楽しかった頃を思い出してしまう。

あの時はいつも笑い声が響いていた。

あの時はいつも楽しかった。

あの時はとても満たされていた。

そんな思い出に浸っているとさらに、あの頃に戻れない、という

虚無感も襲ってきた。

虚しさや悲しさで押しつぶされないうちに、さっさと気分転換しなくてはならなかった。

靴を履いて、置いてある鍵を取って、玄関に鍵を掛けて家を出る。外は少し明るいくらいで、まだ冷え冷えとしていた。

少し身震いして、行くあてもなく歩き始める

そういえば今日はクリスマス。

だけど、プレゼントを交換する相手はいない。と、言うか一緒に過ごしたい奴がいらない。

友達も全員何かしら予定が入ってるし、この歳で家族と過ごす訳がない。

手に息を吹きかけながら、こっそりため息も出す。

気が付くと人気の多い商店街。古くささも残っているが、周りには何かと幸せそうな人達。

羨ましい。

ふとわき上がった感情に、少し疑問を感じる。

自分は、何が羨ましいのだろうか？

自分は何がしたかったのだろうか？

自分は、彼女と何がしたかったのだろうか？

別に大した疑問ではない。本当に、些細な、疑問……。違う。疑問でもない。

自分でも分かるくらい、露骨に思考を止めようとする。

でも、あえて、歩く。

気晴らしに周りを見る。皆、誰かしらと一緒に歩いている。

俺みたいに一人で歩いている奴は少なかった。と、言うか俺だけが一人、ぽつんと取り残されているよう。

……それでも寂しいとは思わなかったが。

結局何もすることなく、一日中、幸せそうな人達を眺めていただけだった。

でも、心は決まった。

時計を見る気も起きず、携帯開いて一人の奴と傷の舐め合いするのも御免だ。

だから、何もせずにボーツとする。

何も考えたくないのに、目が、耳が、肌が彼女と過ごしたこの部屋を感じてしまう。

一緒に過ごした日々がどんどん蘇る。

しばらく思い出に浸っていると、ドアが開いて、彼女が入ってきた。

「話が、あるんだ」

彼女は一見不思議そうにしていたが、居間に入り、座るなり

「何？」

とすんなり聞いてくれた。

「お前との関わり方が分かんなくなってきた……、いや、理由なんか関係ない」

そして一度息を吸い込んだ。

「もう……、別れよう。俺たち」

同時か、すこし過ぎてからか、彼女の目から涙がしたり落ちた。とつさに癖で取り繕ってしまう。

「まあでも、友達からやり直したいだけな？」

こうやって踏ん切りを付けられない。だから俺はダメなのかも知れない。

でも、彼女に傷ついて欲しくなかった。それが、俺のせめてもの優しさだ。

彼女は、しばらくの間泣いていた。その時間が俺の心を壊してい

く。

何分経ったことだろうか……。

ふいに、彼女は口を開いた。

「いいよ」

彼女は涙目だけど、笑顔だった。

「また、友達からお願いします」

……もしかすると、彼女の方が、俺より強いのかも知れない。
と、言うか、だ。

別れた直後なのに

彼女のヒマワリのような笑顔に、また、惹かれることになる。

（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

とにかくすみません。ハッピーエンド？　かも知れません。

あ、ちょっと不自然な部分の解決も、友厨君の所に入れておきました。

さて、この後に友厨君の読んで下さいね。順番的にはそんなのですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7088p/>

Just Be Friends by.友達

2010年12月30日23時07分発行